

平成 27 年度冬季セミナー印象記 “必見 !! 破壊的イノベーションの時代到来 !! 業態変革をもたらすデジタル印刷技術の最新動向”

山南 信太郎*

Shintaro YAMANAN*

(一社)日本印刷学会西部支部は平成 27 年 2 月 19 日(木)に(株)モリサワ・セミナーホールにて「冬季セミナー“業態変革をもたらすデジタル印刷技術の最新動向”」を開催した(写真 1)。今回は、drupa2012 で衝撃デビューした Landa 社 Nanography の進展報告を含め、デジタル印刷技術の最新動向を 4 社 4 名の講師が関西地区で初披露した。以下に、その概要を記す。



写真 1 開会挨拶をされる出井支部長

1. インクジェット枚葉印刷機 KM-1 の概要

コニカミノルタ(株)菅谷豊明氏

コニカミノルタと小森コーポレーションで共同開発している Inkjet 枚葉印刷機『KM-1』は、トナー機で培ったオフィスプリンター技術と捺染分野で実績のあるインクジェット技術を融合して開発を進めている商業印刷を対象としたデジタルプレスである。被印刷メディア適性の高い新開発の UV インキとシングルパス・ヘッドを採用し、両面印刷可能な点に特徴がある。講演の冒頭で紹介した VTR「Change the game with KM-1」でその特徴は出席者に簡潔に伝わっ

た。また、0.6mm の厚みまで対応していることにより、紙器パッケージ分野への拡張も狙っているようだ。本年、フィールドテストを経た後の上市を計画しており、菅谷講師(写真 2)の沈着な技術説明から『KM-1』リリースへの熱い思いが来場者に伝わっていた。



写真 2 菅谷講師

2. drupa の衝撃から 2 年！ ベールに包まれたランダ Nanography の進展

(株)小森コーポレーション 吉川武志氏

Landa 社と提携している小森コーポレーションの吉川講師(写真 3)は共同開発している B1 機を中心に随所に動画を盛込んで『Landa Nanography』の最新状況を披露した。Indigo 開発に携わった Benny Landa 氏が設立した Landa 社の現状の事業形態・規模・取組を述べ、drupa2012 で発表した Nanography の反響とデジタル印刷が狙う市場のポジショニングを振り返り、「デジタル印刷が主流になるための条件」を提示した。これを実現するための技術、即ち、ナノレベル顔料を用いた Nanography の品質を、通常の Inkjet 技術およびオフセット印刷との比較で紹介した。NanoInk をブランケットに打つオフセット方式採用による課題解決(被印刷体の汎用性、品質、生産性)は順調に

*富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ(株)大阪支社技術部
(〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町 4-1-3)

進んでいるようだ。今回の冬季セミナー出席者たちも、早く印刷サンプルを目の当たりにしたい模様で、吉川氏の滑らかな語りに熱心に耳を傾けていた。



写真3 吉川講師

3. レスポンス率を劇的に向上させる新しい広告モデルの事例紹介

コダック合同会社 河原一郎氏

河原講師（写真4）は、冒頭に「インクジェット事業部が独立した」とのニュースを会場で伝え、現在展開しているインクジェット事業の「効率性」と「付加価値」軸での製品ポジショニングを述べた。その後、インクジェット・ヘッド『Prosper Sシリーズ』を印刷機や加工機に後付したハイブリッド印刷の事例とその広告効果を、国内7例、海内1例の計8例について紹介した。その中の、「バリエブル印刷で勧誘くじ付きチラシを印刷し、そのチラシからログを収集して、効果計測する」という事例では、新しいプロモーション展開を考慮した高付加価値チラシを可能にする。会場の出席者も、バリエブル・ハイブリッド印刷に



写真4 河原講師

よるレスポンス率向上事例の紹介に紙メディアによる新しい広告モデルの芽生えを感じていた。

4. 枚葉デジタル印刷機に求められる技術課題の解決と今後

富士フイルム デジタルプレス（株）宮城安利氏
宮城講師（写真5）は、冒頭に「今日は“にわかインクジェットプレス専門家”になって帰って下さい」といきなり目標を提示した。その後、印刷会社が直面するデジタルプレスの必要性から始まり、drupa2008で発表した富士フイルムのデジタルプレス『JetPress720S』は二世代目になったことを発表した。次に、デジタルプレスに搭載されている技術の中で、最も難易度の高い「連続インク打滴コントロール」により、滑らかな階調再現が可能になることを訴えた。また、着弾干渉を抑制する「Raptic技術」と画像補正技術が高品質化のキーポイントであることを強調した。最後に、宮城氏は講師や受講者に向けて「皆さん、早くデジタルプレスを市場に出して下さい！」と問い掛けた。そこには、実際の仕事で使うために必要となるデジタル印刷技術の奥深さが潜んでいるのであろう。



写真5 宮城講師

5. まとめ

今回の冬季セミナーの4つの演題は、新たな時代のデファクトを目指す「デジタル印刷技術」の各社アプローチを考察する場となった。「紙・インキ・熱と空気を如何にコントロールして行くか」という技術課題が根底にあり、各社がその実現に向けて凌ぎを削っている、その一角を垣間見た想いである。この課題に立ち向かう最新技術動向を披露した平成27年度初回の冬季セミナーは、印刷学会西部支部の新たな幕開けに相応しい内容であった、と言える。